

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 6 日現在

機関番号：34314

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2016

課題番号：25370141

研究課題名(和文) 綴織当麻曼荼羅図の研究

研究課題名(英文) Study on Taima Mandala Tapestry

研究代表者

大西 磨希子(Onishi, Makiko)

佛教大学・仏教学部・教授

研究者番号：00413930

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究課題では、綴織当麻曼荼羅を中心に、唐代の仏教文化が仏教政策とどう関係し、また日本にどのように移入したのかという問題を検討した。具体的には、綴織当麻曼荼羅を手がかりに、諸州官寺制と唐代仏教文化の伝播との関係、綴織当麻曼荼羅の九品来迎図の図様、唐代变相図の画面構成にみられる空間認識などの問題について考察した。本研究課題では、関連作例として奈良国立博物館所蔵刺繍釈迦説法図や、敦煌莫高窟壁画、敦煌写本の『宝雨経』についても検討を加え、論文として発表するとともに、最終年度はこれらの研究成果に加えて、綴織当麻曼荼羅の日本伝来にかかわる手続きや経路に関する新稿を書き下ろし、著著として発表した。

研究成果の概要(英文)：In this research, I discussed about Taima Mandala Tapestry as historical and cultural relic of Buddhist art produced by Tang Court and brought to Japan. I also examined relating works such as the Nara National Museum's Embroidery Illustrating Sakyamuni Buddha Preaching, wall paintings of Dunhuang Mogao Grottoes and Dunhuang manuscripts to examine the relationship between Buddhist culture and Imperial politics on Buddhism during the Tang dynasty including Emress Wu's era. These results were published in journals and worked up into the monograph on Buddhist Art in the Tang dynasty.

研究分野：仏教美術

キーワード：美術史 仏教 当麻曼荼羅 敦煌 弥勒变相図 則天武后 則天文字 来迎図

1. 研究開始当初の背景

綴織当麻曼荼羅は、当麻寺に伝来する西方浄土変(阿弥陀浄土図)の代表的作例であり、鎌倉時代以降に制作された無数の転写本の原本でもある。

研究代表者は、1999年以來、敦煌莫高窟を対象に西方浄土変と十六観図の実地調査を継続してきた。その結果、従来は阿弥陀浄土の造形化は『観無量寿経』(以下『観経』)とは無関係なところから始まったとされてきたが、実際には『観経』こそが西方浄土変の主要な典拠であったことを明らかにした。すなわち、『観経』の「十六観」とは、往生浄土を目的として阿弥陀浄土を観るための方法として説かれたものであり、西方浄土変は本来その視覚教材として生み出された可能性が見えてきた。しかし敦煌の実作例では、『観経』十六観を忠実に図示したものはごく少数で、盛唐期においてすでに写し崩れが生じており、時代が下るにつれて經典との乖離が進むことが明らかとなった。

一方で、こうした敦煌の作例とはきわだった対照をなす作例として浮かび上がってきたのが、綴織当麻曼荼羅である。本図には、外縁の十六観図のみならず、中台の浄土変にも十六観のモチーフが『観経』所説にきわめて忠実かつ正確に表現されている。そのため、綴織当麻曼荼羅は唐代の宮廷工房による、いわば欽定の標準作である可能性がきわめて高いと推定される。しかも、宮廷工房で制作された標準作は、諸州官寺制によって天下諸州に頒布された可能性が高く、綴織当麻曼荼羅はこうして制作された中の一つであったと考えられる。さらに、綴織は唐の国外への持ち出しが禁じられていたことから、日本へは遣唐使への回賜品として齎された蓋然性が高い。

このように綴織当麻曼荼羅は、日本の浄土教美術に多大な影響を及ぼした作例であるだけでなく、唐代西方浄土変の真面目を示す作例でもあり、しかも唐代の宮廷と仏教美術との関係を考察するうえでも貴重な作例であるといえる。そこで本研究は、綴織当麻曼荼羅に関わる、残された未解決の課題に取り組んだものである。

2. 研究の目的

本研究の目的は、綴織当麻曼荼羅に関する未解決の問題に取り組むことにより、当麻曼荼羅についての研究を深化させるとともに、綴織当麻曼荼羅を手がかりに、唐代仏教美術の伝播や日本への移入の具体相を明らかにするところにある。

そこで本研究では、具体的な課題としてつぎのような課題を設定し、研究を行った。

(1) 当麻曼荼羅研究の一つの大きな謎として、失われた画面下部の九品来迎図の図様とが本来どのようなものであったのかという問題がある。そこで、研究史を洗い直し、問題の所在を明らかにするとともに、敦煌壁画

の調査にもとづき復元的考察を試みる。

(2) 綴織当麻曼荼羅のような宮廷主導の仏教文化がどのように伝播したのかという問題意識のもと、武周期に訳出された『宝雨経』写本を取り上げ、底本の書写年代を明らかにすることによって王朝に重視された經典が短時日のうちに大量に書写され版図内に広く頒布されたことを明らかにする。

(3) 綴織当麻曼荼羅のような国外持ち出し禁止品について、唐朝内ではどのような規定があり、どのような手続きや経路により日本に齎されたのか、『天聖令』を中心に検討し、具体相を描き出す。

(4) 綴織当麻曼荼羅のような標準作を制作したと考えられる宮廷工房とは具体的にどの組織なのかについて明らかにする。

3. 研究の方法

(1) 壁画調査

綴織当麻曼荼羅の九品来迎図の復元的考察の前提となる中国唐代の九品来迎図、および綴織当麻曼荼羅の関連作例としての弥勒变相図について、それぞれ作例の現存する莫高窟壁画を対象に調査を行った。

調査窟は、平成25年度は計9窟(第171窟、第215窟、第431窟、第78窟、第91窟、第338窟、第314窟、第329窟、第331窟)、平成28年度は計12窟(第78窟、第71窟、第220窟、第431窟、第329窟、第331窟、第171窟、第334窟、第341窟、第404窟、第332窟、第335窟)を調査した。

(2) 写本研究

唐代における仏教文化の伝播と諸州官寺制の関係を裏付けるための手がかりとして、『宝雨経』写本を対象に、則天文字の使用状況を調査し、書写年代を明らかにし、関連する問題について検討を行った。

調査方法は、敦煌写本とトルファン写本は、公刊されている影印や公開されているデジタル画像を使用し、奈良の聖語蔵写本のうち、4巻(巻二、巻五、巻八、巻十)はCD-ROMを使用した。聖語蔵写本のうち図版が公刊されていない東京国立博物館所蔵の巻九については、平成26年度に同館に写真撮影を申請し、得られた写真データをもとに調査を行った。

(3) 唐令研究

綴織当麻曼荼羅の日本伝来について、唐令の復原研究において、いまやもっとも重要な史料となっている『天聖令』の関市令を中心に、『唐令拾遺』『唐令拾遺補』『養老令』『唐律疏議』などの関連史料を用いて検討を行った。

4. 研究成果

【平成25年度】

本研究の初年度にあたり、まず綴織当麻曼荼羅の制作背景と伝来経緯について、諸州官寺制および唐令との関連を視野に入れて考察し、論文として発表した。すなわち、綴織当麻曼荼羅のようにきわめて高度な技術によって正確な図様を織り表した作品は、唐の宮廷工房による標準作と考えられること、それらは諸州官寺制という仏教の公式ネットワークを通じて天下諸州に頒布され、規格性の強い仏教美術を全土に広げる役割を果たしたと考えられることを指摘した。また、綴織は唐代において国外への持ち出しが禁じられていたことから、日本への伝来は遣唐使への回賜品としての経路以外には考え難いことを指摘した。

また、関連研究として、聖語蔵に蔵される『宝雨経』について、則天武後の使用状況を調査し、底本の書写時期や伝来時期などを明らかにし、その成果を論文として発表した。

【平成 26 年度】

前年度末に立てた研究の推進方策にもとづき、つぎの研究成果を論文 4 本にまとめ発表した。第一に、綴織当麻曼荼羅の九品来迎図について、従来の研究史を整理して問題の所在を明らかにしたうえで、敦煌莫高窟に残る唐代の関連作例の調査から得られた知見をもとに復元的考察を行った。

第二に、光明皇后御願の五月一日経『宝雨経』のうち、これまで全容が知られていなかった東京国立博物館所蔵の巻九について、則天文字の使用状況の調査により底本の書写時期を特定し、正倉院文書から関連記事を探ることにより、当該写経に関わる書写や校正の時期を含めた進捗状況を史料にもとづき具体的に跡付けた。

第三に、綴織当麻曼荼羅と同様の仏画的工芸品であり、かつ唐の宮廷工房による制作と推定される奈良国立博物館所蔵刺繍釈迦如来説法図について研究史を整理し、これまでの研究で明らかにされてきた点を確認したうえで、問題の残る主題について検討を加えた。すなわち本図の主尊倚坐仏は則天武后と関係の深い弥勒仏像の可能性が高く、画面下部中央の人物群像は則天武后と彼女の登極を翼賛した薛懐義や法明ら十人の沙門を表しているとの新たな見解を提示した。

第四に、綴織当麻曼荼羅の九品来迎図研究から導かれた成果として、唐代の変相図には阿弥陀浄土と娑婆世界とが別空間であるとの認識が存在し、そのことが画面構成に明確にあらわれていることを指摘した。すなわち、綴織当麻曼荼羅にみられる中台と外縁からなる画面構成は、中台＝阿弥陀浄土、外縁＝娑婆世界という空間の違いに由来し、かつ外縁に描かれた土坡などのモチーフは、娑婆世界の記号的表象であることを指摘した。したがって、当麻曼荼羅下縁の「九品来迎図」に対して、従来まま見受けられた「九品往生図」との呼称は誤りであり、下縁の娑婆世界で生

起する現象として「九品来迎図」と呼ぶべき図であることを明らかにした。

【平成 27 年度】

本研究では一年目と二年目に、綴織当麻曼荼羅の関連研究として、則天武后に関わる仏教美術や写本の問題を取り扱った。また綴織当麻曼荼羅は阿弥陀信仰にもとづく西方浄土変の代表的作例であり、阿弥陀信仰はしばしば弥勒信仰と比較され、敦煌莫高窟においても西方浄土変に相對する壁面に弥勒下生経変が描かれることが多い。そこで、唐代の弥勒下生経変の出現背景について、研究を行い、論文にまとめて発表した。すなわち、敦煌における弥勒下生経変の流布と、洛陽を中心とした倚坐形如来像の弥勒仏への固定化と、倚坐形弥勒大仏の盛行は、いずれも則天武后の執政期に起きていること、さらに弥勒下生経変において弥勒仏の正面に七宝を供物のように描く作品には、転輪聖王(金輪王)でありかつ弥勒仏でもあるという則天武后のイメージが投影されていることを指摘した。

【平成 28 年度】

最終年度として、第一に、綴織当麻曼荼羅の九品来迎図を復元的に考察するうえで重要な敦煌莫高窟の唐代の壁画調査を行い、描き起こし図を作成した。とくに第 431 窟と第 215 窟の九品来迎図は、九品の全場面について描き起こし図を作成することができた。第 171 窟は部分的に描き起こし図を作成した。これらはいずれも、図版は公刊されているものの、図像の細部まで読み取ることのできる描き起こし図はなかったことから、図像研究の資料となる価値をもつ成果といえる。

第二に、綴織当麻曼荼羅の制作を担当した唐の宮廷工房が、具体的にどの組織であったのかについて再検討し、尚功局としていた旧稿の考えを改め、少府監であった可能性が高いとの見解に達した。

第三に、綴織当麻曼荼羅が唐令において国外への持ち出しが禁じられていた「織成」に該当することに関連し、国外持ち出し禁止品を含めた唐代文物が、いかなる手続きや経路を経て中国国内から持ち出され日本に齎されたのかについて、『天聖令』を中心に検討した。

また平成 28 年度は、幸いにして科学研究費補助金の学術成果公開促進費(学術図書)(課題番号 16HP5017)の交付を受けることができた。そこで以上の研究成果を、その補助を受けて刊行した『唐代仏教美術史論攷 仏教文化の伝播と日唐交流』(法蔵館、2017 年)の第一部第四章の挿図、第二部第一章第五節、第二部第四章として発表した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 9 件)

【平成 28 年度】

大西磨希子(中文)「九品来迎図考—论唐代变相图中的空间认知」,敦煌研究院编《2014 敦煌论坛—敦煌石窟研究国际研讨会论文集》上冊、甘肃教育出版社、査読無、2016 年、pp.232-255

【平成 27 年度】

大西磨希子「唐代における倚坐形弥勒仏の流布と武則天」,『敦煌寫本研究年報』10 号、査読有、2016 年、pp.423-436

【平成 26 年度】

大西磨希子「五月一日經『宝雨經』余滴」,『敦煌寫本研究年報』9 号、査読有、2015 年、pp.39-55

大西磨希子「奈良国立博物館所蔵 刺繍釈迦如来說法図の主題—則天武后期の仏教美術—」,『佛教史學研究』57 卷 2 号、査読有、2015 年、pp.1-31

大西磨希子「綴織当麻曼荼羅の九品来迎図に関する復原的考察」,『印度學佛教學研究』63 卷 1 号、査読有、2014 年、pp.97-104

大西磨希子「九品来迎図考—唐代变相図における空間認識—」,林温編『図像学(浄土教・説話画)』〔仏教美術論集 3〕、竹林舎、査読無、2014 年、pp.179-203

【平成 25 年度】

大西磨希子「聖語藏の『寶雨經』—則天文字の一資料—」,『敦煌寫本研究年報』8 号、査読有、2014 年、pp.69-82

大西磨希子(中文)「佛教藝術與唐朝宮廷—綴織當麻曼荼羅圖管窺」,劉淑芬・Paul R. Katz 編《信仰、實踐與文化調適:第四屆國際漢學會議論文集》、上冊、中央研究院(台湾)、査読無、2013 年、pp.251-270

大西磨希子「綴織当麻曼荼羅図伝来考—奈良時代における唐文化受容の様相—」,『大橋一章博士古稀記念美術史論集:てら ゆきめぐれ』、中央公論美術出版、査読無、2013 年、pp.235-249

〔学会発表〕(計 10 件)

【平成 28 年度】

大西磨希子「敦煌莫高窟の弥勒下生経変と則天武后」,第 24 回国際仏教文化学術會議「仏教と未来」,2016 年 11 月 13 日、佛教大学(京都府京都市)

大西磨希子「唐代官方寫經及其傳播—以《寶雨經》爲線索」(中国語)、考古与藝術 文本与歷史—絲綢之路研究新視野國際学術研討会、2016 年 7 月 21 日、陝西師範大学(中国・西安市)

【平成 27 年度】

【平成 26 年度】

大西磨希子「敦煌莫高窟の弥勒下生経変—倚坐形弥勒仏と則天武后—」,2014 年度第 3 回中央アジア科研全体研究会、2015 年 2 月 21 日、龍谷大学(京都府京都市)

大西磨希子「唐代における倚坐形彌勒佛の流布と武則天」,敦煌學國際學術研討會・京都 2015、2015 年 1 月 29 日、京都大学(京都府京都市)

大西磨希子「勸修寺繡仏の主題をめぐる一試論—武則天と仏教美術の視点から—」,平成 26 年度仏教文化研究会、2015 年 1 月 24 日、佛教大学(京都府京都市)

大西磨希子「綴織当麻曼荼羅の九品来迎図に関する復原的考察」,平成 26 年度日本印度学仏教学会第 65 回学術大会、2014 年 8 月 30 日、武蔵野大学(東京都江東区)

大西磨希子「五月一日經『寶雨經』餘滴—東京国立博物館所蔵の巻九および譯場列位—」,中國中世寫本研究 2014 夏期大會、2014 年 8 月 23 日、京都大学(京都府京都市)

大西磨希子「九品来迎圖考—論唐代變相图中的空間認知—」(中国語)、2014 敦煌論壇:敦煌石窟研究國際學術研討會、2014 年 8 月 16 日、敦煌研究院(中国・敦煌市)

【平成 25 年度】

大西磨希子「奈良国立博物館所蔵 刺繍釈迦說法図の主題について」,佛教史學會 第 64 回 学術大会、2013 年 11 月 16 日、龍谷大学(京都府京都市)

大西磨希子「綴織當麻曼荼羅の図様解釈」,當麻曼荼羅完成 1250 年記念特別展「當麻寺—極楽浄土へのあこがれ—」学術シンポジウム「綴織當麻曼荼羅」(招待講演)、2013 年 4 月 27 日、奈良国立博物館(奈良県奈良市)

〔図書〕(計 1 件)

【平成 28 年度】

大西磨希子、『唐代仏教美術史論攷—仏教文化の伝播と日唐交流—』法藏館、2017 年、456pp.

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年月日:
国内外の別:

取得状況(計 0 件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:

番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者
大西磨希子 (ONISHI MAKIKO)
佛教大学・仏教学部・教授
研究者番号：00413930

(2)研究分担者
()

研究者番号：

(3)連携研究者
()

研究者番号：

(4)研究協力者
()